

# インドネシア人看護師の定住外国人としての 「ライフ」のプロセス

中 谷 潤 子<sup>†</sup>

Settlement Process Patterns of Non-Japanese Residents:  
An Ongoing Study of an Indonesian Nurse's "Life" in Japan

NAKATANI Junko

## Abstract

This study clarifies the process of how an Indonesian nurse who moved to Japan over 10 years ago has settled into his "life" as a non-Japanese resident. So far 8 interviews have been conducted. Some of the areas he has talked about are, confusion and problems settling into the Japanese work environment, feelings for family in his home country, a return to Indonesia and subsequent return to Japan, and how he started living with his daughter. Using a TEM (Trajectory Equifinality Modeling) diagram, I show the transformation of life that arises from the material gathered from the interviews. I've found some common characteristics among foreign residents in recent years, but also simultaneously, one cannot ignore the diversity prevalent among non-Japanese residents.

キーワード：インドネシア人看護師，定住外国人，TEM

## 1. 背景

2008年から，EPA (Economic Partnership Agreement：経済連携協定) によるインドネシア人看護師及び介護士候補生の受け入れが始まった。その後2009年にはフィリピン，

---

<sup>†</sup>大阪産業大学 国際学部国際学科 教授

草 稿 提 出 日 10月31日

最 終 原 稿 提 出 日 11月 8 日

2014年にはベトナムからの受け入れも行われている。日本で看護師として働くには、日本の看護師国家試験に合格する必要がある。看護師候補者は、日本語などの研修を来日前、そして来日後にも行い、受け入れ後3年以内での国家試験合格をめざす。しかし、合格は予想以上に遠い道であり、日本語教育の分野では政策課題、そして国家試験問題の分析や対策などの研究がされてきた(岩田・庵2012など)。これらの研究をとおして、看護師候補者受け入れに対する日本側の在り方が強く問われてきたといえる。2010年度の試験からは、「難解な用語や表現は言い換える」、「難解と判断される漢字にふりがなを振る」、「疾病名には英語を併記する」などの措置がとられ、2012年度試験からは、EPA看護師候補者の試験時間は一般受験者の試験時間から1.3倍延長され、すべての漢字にふりがなを付けた問題用紙が配布された。しかし、このような対応は事前に周到に検討されたものではなく、対処療法に近いものと言わざるを得ない。

そのような中、2008年には104名だったインドネシア人看護師候補者が、2009年の173名を頂点に減少していき、2021年にはわずか8名と1桁に落ち込んでいる(表1参照)。厚生労働省「経済連携協定における受け入れの枠組」によると、フィリピンからはスタートした2009年には93名が来日したのに対し、2021年は11名と減少、またベトナムからはスタートした2014年には21名、そして2021年には37名とあまり増減はない。一方、介護士候補者はインドネシアから2008年に104名で、2019年がピークの300名、2021年には263名である。フィリピン、ベトナムからの介護士候補者も同様に増加傾向だが、インドネシアからの候補者が最も増えている。応募に際し、看護師候補者には2年の実務経験が要求されるのに対し、介護士については、インドネシアに介護士という職業がないこともあり実務経験は要求されない。また、2021年度の看護師国家試験の候補者の合格率が6.3パーセントなのに対して、介護士国家試験の合格率は2021年度で27.2パーセント、さらに50パーセントを越えた年度もある。このような壁の低さが介護士候補者が集まる要因といえるかもしれない。

執筆者は、インドネシア人看護師候補者自身の人生における日本体験に関心を寄せた。EPA看護師候補者といえ、一人一人はそれぞれが来日目的、日本語学習、日本体験をもち、ライフストーリーを築いている。個人の生の声は、受け入れ開始当初は、あまりクローズアップされてこなかった。しかし、スタートから10年を越えると、候補者自身に焦点をあて、帰国後までも追っている浅井・箕浦(2020)、平野・米野(2021)などの研究も出てきている。

受け入れがはじまった頃、看護師・介護士候補者たちは日本側の思惑の波にもまれていくようにもみえた。その中で、はたして何を考え、何を支えに日本で生活し、合格をめざし続けているのかを、彼らの「語り」から知りたいと考え、インタビューを始めた。今で

表1 インドネシア人看護師候補者

'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	計
104	173	39	47	29	48	41	66	46	29	31	38	23	8	722

(厚生労働省)

は、すでに来日10年以上になり看護師として活躍しながら、家族と定住している元EPA候補者もいる。本研究では、来日10年以上になるインドネシア人看護師の来日前から現在までの言語習得や異文化接触、そして日本での生活体験について語られたライフストーリーから、日本で生活者としてのスタイルを構築していくそのプロセスを描き出そうと試みている。

やまだ(2000)によると、「英語のライフのうち、『人生・生涯』『生活』『生・いのち』『生き方・人生観』」の中の「語られた生の一部と経験としての生をライフストーリーとして見なす」。さらにやまだは、物語を語ることが語るものと語られるものとの共同産物であることも指摘する。「語り手と聞き手の相互行為から、ストーリーは生み出されるが、それはその場の状況的文脈によって変化する。したがって、語り手の物語は、語る相手によっても、場の雰囲気や状況によっても影響される。また、語り手と聞き手は、一方的な関係ではなく、対話的關係であり、共に物語生成にかかわる(やまだ:2000)。」したがって、協力者のライフストーリーとは、インタビュアーの前で語ることで生みだされた「物語」である。

## 2. 先行研究

前述のように、EPAによる看護師・介護士候補者受け入れ当初は、受け入れ側日本の制度・日本語教育・日本語習得などプログラムそのものについての研究が主だった。看護師国家試験の日本語に関しては、岩田・庵(2012)や奥田(2011)をはじめとし、文法や語彙の困難点などの分析がなされている。また、岡田・宮崎(2012)では国家試験の前後や看護師業務に必要な日本語についての日本語支援者の課題を調査している。さらに、制度そのものに関しては、奥島(2010)に背景となるインドネシアの看護師事情や医療業務事情と日本側がEPA制度に寄せる思惑や期待、そしてその課題について詳述されている。奥島は、受け入れ機関の学習支援体制や看護師候補者たちの学習相談内容など、生の現場の状況をも詳細に調査している。

その後、EPAプログラムがスタートしてから10年以上となると、インドネシアからの候補者たちの軌跡と語りを記述した浅井・箕浦(2020)や、インドネシア、フィリピン、

ベトナムからの候補者の体験と体制そのものの課題を詳細に分析した平野・米野(2021)など候補者そのものに焦点をあてた研究も出てきている。浅井・箕浦(2020)には、看護師試験合格後、家族を呼び寄せ定住する家族や、帰国後結婚し、パートナーとともに再来日するケースなどについても紹介されており、EPAプログラムの継続がもたらす多様な「ライフ」形成がみられる。

### 3. 調査

#### 3-1 調査協力者

本研究の対象であるA(仮名)は、2009年にEPA看護師候補者として来日した30代の男性看護師である。協力者Aにはこれまで計8回インタビューを行った。看護師国家試験合格前の2012年、合格直後の2013年、そして正看護師として就労して約1年後になる2014年、インドネシアへの帰国前の2016年、2018年の再来日後、さらに2020年に現在の病院へ移ってからと、その1年後の2021年はコロナ禍のためZOOMで、そして2022年7月には、3年ぶりの一時帰国前に対面でインタビューを行っている。対面でのインタビューは、いつも喫茶店などで行い、時間は1回1時間から2時間ぐらいである。Aにはインドネシア語と日本語のうち話しやすい言語で話してもらい、はじめはインドネシア語で話しているほうが多かったが、回を重ねるごとに日本語の割合が増え、2022年のインタビューは、ほぼ日本語だけでやりとりをしている。インタビューは、承諾を得たうえで録音し、文字化した。

本研究ではこの経年的に行ったAへのインタビューをもとに、来日前から現在までのライフストーリーから、日本で定住外国人としての生活を構築していくプロセスを明らかにしたい。

#### 3-2 分析の枠組み

本研究では、Aに対して行った計8回のインタビューをもとに分析をする。Aについては、これまでもそのライフストーリーを描き出し、成果として発表してきた(中谷2017ほか)。滞日が10年を超えることになろうとはAも予想していなかったことで、それには環境とのさまざまなインタラクションが要因となる。そこで、これまでの変遷を描き出すために、分析の枠組みとしてTEM(複線径路等至性モデリング: Trajectory Equifinality Modeling)を用いることとする。TEMはプロセスを描き出すのに有効な分析方法であるといえ、そのプロセスはTEM図として示される。そしてTEMをもとに発展した枠組みがTEA(複線径路等至性アプローチ: Trajectory Equifinality Approach)であり、安

田・サトウ（2022）によると、TEAはHSI（歴史的構造化ご招待：Historically Structured Inviting）、TEM（複線径路等至性モデリング：Trajectory Equifinality Modeling）、TLMG（発生の三層モデル：Three Layers Model of Genesis）の3つの要素で構成されている。TEAは、多様な人生の径路が収束するEFP（等至点：Equifinality Point）までの径路が複数あるという複線性と非可逆的時間の導入で、後戻りできない時間の中での径路を記述するTEMをもとに発展した。基本的には、EFPを設定し、それに至る経緯をインタビューで明らかにし、そのプロセスを記述することが多い。例えば、EFPを「家業を継ぐことに決める」とし、P-EFP（Polarized EFP：両極化したEFP）を「家業を継がないことを決める」とすると、この軸の「家業を継ぐことを決めた」その現実のありさまをとらえるのである（安田・サトウ2022）。しかし本研究は、経年的に収集してきたインタビューからわかる定住化プロセスをTEMを用いて示そうとしている。つまりはじめからTEA、TEMを分析方法として設定して調査を行ったものではない。それで、まずTEAでの要素のうちHSI、TLMGの概念を簡単に述べ、本研究でTEMを用いることにした経緯を説明したいと思う。

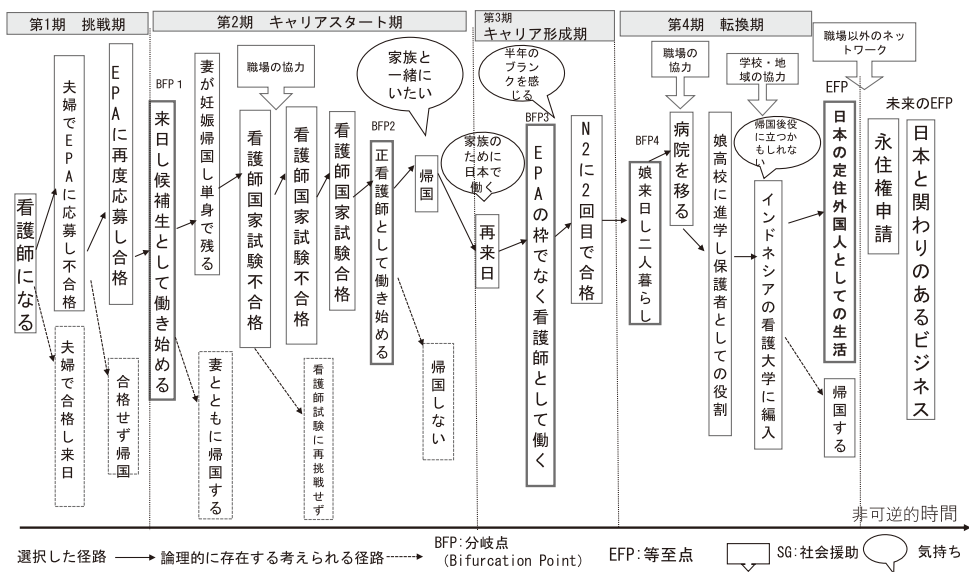
HISとは「研究目的のもと、ある行動や選択、認識のありさまなどをEFPとして定め、EFPに至るプロセスをとらえるべく、その経験した人びとを対象にインタビューや観察を行うことを含意する理論である」（安田・サトウ2022）。そしてTLMGとは、「径路の選択プロセスにおいて、自己を3つの層からなるものと概念化したうえで層間の動的な記号の働きをとらえることで、個人の自己変容や行動変容を記述するモデルである」（安田・サトウ2022）。実のところTEAはかなりフレキシブルな分析方法だといえる。安田・サトウ（2022）では「TEAを用いるときには、調査者が調査目的に沿って、使用するツールや概念を選択することができる。したがって、TEAを構成するすべての概念を用いる必要はなく、また概念について頑なになりすぎてもいけない」とも述べられる。前述のように本研究はある決まったEFPを設定し、それをもとにインタビューを行い、プロセスを明らかにするものではない。研究協力者がどうして「いま」に至ったのかについて、これまで10年にわたり収集してきた、「ライフストーリー」を一つの流れとしてまとめ、そのプロセスを示そうと試みるものである。安田・サトウ（2012）では、「GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）やKJ法が構造を発見するための大きな手順的枠組みを示すものであるのに対し、TEMはプロセスを明確に記述するために、環境と人間の関係性を読み解くための概念を用意している。つまり、GTAやKJ法が構造を明確にするのに対し、プロセスを明確にするのがTEMである」と述べられている。執筆者はこれまでGTAを研究で用いたこともあるが、Aのライフにおける「プロセス」の重要性を感じ、その変遷を描きた

いと考えたためTEMを用いることにした。

また、荒川・安田・サトウ(2012)では、TEMで何人のデータを扱うかという点について、「1人のデータによるTEMは、多人数のTEMに比べて現象を詳しく記述することができ」、「1人の話を分析すれば深みが出る」としている。そこで本研究では、協力者A 1人の日本でのライフステージを丁寧にたどり、滞日要因や意識変容を示したい。

#### 4. 考察

協力者AについてのTEM図をもとに、4つのEFPについて順に述べていく。



TEM図

##### 4-1 挑戦期—EPA看護師候補者として

Aはインドネシアのジャワ島東部にある病院付属の看護学校で学び、卒業後地元を離れて就職し、2年間働いた。看護学校時代の同級生と結婚し、子どもも二人いたが経済的な問題がきっかけで、2008年のEPA看護師候補生第1期の募集に妻とともに応募した。その時には、妻だけが合格して来日する。妻からは日本での生活の大変さが伝えられたが、Aは2009年、「再び応募し合格：BFP1」して、子どもを両親に託して来日する。

インドネシアでの看護師の給料は高いとは言えない。特に「日本」を目指していたというわけではないとAは言う。だが、海外への移住労働者が少なくないインドネシアから日本で看護師候補生として働くことを選んだ理由としては、EPAのプログラムが民間の業

者ではなく日本政府主導の事業だというので、信用できるという思いはあった。そして来日し、妻と同系列の病院に配属され、同居生活が始まった。

#### 4-2 第2期：キャリアスタート期—看護師試験に合格して

ところが来日後、妻は3人目を妊娠し、看護師試験合格への道を断念してインドネシアに帰国する。やっと日本で看護師としてよい収入を得るための道を歩き始めたAにとって「妻とともに帰国する」という選択肢はなかった。一人残り、2011年、2012年の看護師試験に挑戦したが、合格できなかった。しかし病院からは、次回はきっと合格できるからと3度目に挑戦することを勧められ、2013年の看護師試験受験を決意する。Aは職場の人たちにも申し訳ないと思い、もし合格したら、家族を日本に呼び寄せて、一緒に暮らしたいと考えていた。

試験終了後はあまり手ごたえを感じられなかったが、合格したときは、病院の人たちはもちろん、インドネシアにいる家族も喜んでくれた。子どもも日本に行きたいと言った。こうして看護師国家試験に合格して、「正看護師として働き始めて：BFP2」も、やはり日本語が一番大変だと感じていた。同僚とのコミュニケーションや看護記録作成の際など実践的に日本語を運用するようになると、試験合格のための日本語では十分ではないと感じる。そして正看護師になり1年が経つと、2交代制の勤務体系で夜勤もこなすようになった。また同僚と休みの日に遊びに行ったりするなど、生活の中で楽しみも見つけられるようになってきた。

家族を日本に呼び寄せたいという気持ちはあるのだが、なかなか実行に移せないまま日が過ぎていく。子どもにとっても、たとえ数年でも日本の学校に通うことはいい経験になるだろうと思うのだが、手続き、住むところなど色々乗り越えなければならないことがある。家族とはLINEやスカイプで連絡を取っているが、離れている期間がどんどん長くなっていく。そのため、子どもの誕生日をつい忘れてしまったり、一時帰国したときに子どもが自分を避けるように向こうへ行ってしまうたり、少し距離を感じることもあり、悲しい。しかし妻もこの生活リズムに慣れてきて、日本に行きたいともあまり言わなくなった。

日本での勤務に慣れていくにつれ、家族と離れていることについて考えることが多くなり、「家族と一緒にいたい」ことから、2016年秋に帰国を決意する。ただ当時のインタビューでその理由を聞いても、明確な答えは返ってこず、「どうしてかなあ」、「また戻ってくるかもしれない」と言っていた。

帰国したEPA看護師の多くは、日本の国家試験合格、不合格に関わらず、インドネシ

Aで医療に関連する分野の日本語通訳などに従事する。看護師より楽なうえに給料もいい。それを見越して、日本にいるうちから帰国後の就職に有利なように、日本語能力試験N2合格を目指している。しかし、たとえ看護師国家試験に合格していても、日本語能力試験は語彙や読解が広範囲から出題されるため、看護師分野についてだけ勉強してきた彼らにとっては難解だそうだ。Aも受験しようと勉強をしたが、むしろ自分にとっては看護師国家試験のほうが易しいと感じると述べていた。

インドネシアに帰国して少しの間は、東ジャワ州にある地元でゆっくりと過ごしていた。しかしそうもしてられない。地元で看護師として働いても、子ども3人を育てるのに十分な収入だとは言えない。そもそもそれが理由で、日本で働くことを決意したのだ。EPAの同期と一緒に、首都ジャカルタにある日系企業の人材募集に応募もしてみた。また看護師として働くにしてもジャカルタの病院、特に日本人をはじめとする外国人患者のための病院であれば、地元の病院で働くより収入もいい。しかしジャカルタに単身赴任をするのであれば、単身日本で働いても同じである。しかも日本で働くほうが給料もいいし、今の自分にとっては日本の医療現場のほうが身近だし慣れている。このように現実の状況に向き合った結果、Aは帰国して半年ほどで、再び「家族のために日本で働く」ことを決意する。

インドネシアに帰国する前に知り合った病院関係者には、もし日本に戻りたくなったら声をかけてほしいと言われていた。連絡し、スカイプで面接を受けるとあっという間に再就職先が決まってビザもあり、再来日することとなる。

#### 4-3 第3期：キャリア形成期—日本で看護師として働く

今度は、EPAの枠を外れ、「日本で正看護師として働く：BFP3」こととなる。たった半年現場を離れただけでもブランクを感じた。また帰国前と同じ地方にある病院ではあるが、以前と違う地域に住むと、少し方言が違ったり、住環境も変わったりして異文化を感じることもあった。しかし、看護師に合格してからもチャレンジしていた日本語能力試験N2には、2回目の受験で合格することができた。そして学校の休みには、家族が日本に遊びにくることもできた。それがきっかけなのか、当時中学生だった長女が日本に住みたいと言い出し、来日することになる。Aが勤めていた病院の寮は単身者用で、長女と一緒に住むことはできず、これを機に病院を変わることにする。それでAは、ハローワークを訪れて求人情報を得て、新しい病院に移ることになる。



#### 4-4 第4期：転換期—娘とともに将来を見据える

「娘が来日し、二人暮らしが始まる：BFP4」。住んでいる地域にある地元の中学校では外国人生徒としての支援が受けられるが、2年後には高校受験もあるし、コロナ禍で学校での十分なコミュニケーションも期待できないかもしれない。Aは仕事の後帰宅してから、娘に日本語を教えたりとこれまでにない生活パターンを経験することとなった。またこれまででは単身生活だったため、職場と来日当初から通いつけているプロテスタントのインドネシア人教会、そして同僚やインドネシア人の友人とたまに旅行に行ったり、レストランやカフェで集ったりするぐらいのネットワークしかなかった。それが娘の来日にもとまない、まず、ビザや生活面について色々と職場の世話にもなる。また、保護者として学校へ出向き、三者面談なども体験する。さらに娘の高校進学に向けて、中学校だけでなく地元の国際交流協会を訪れ、「外国人生徒にかかる特別枠選抜」についての説明を受け、受験、進学を親としてサポートする。特別枠がある高校は、現在の住まいの近くではなかったため、娘の通学の利便性を考え、高校の近くに引っ越したほうがいいのかと考える。それならば賃貸より、家を買ったほうがいいのかと思い不動産屋を訪ねる。しかし外国人は、永住権がないとローンを組むことができないと知る。それで結局、娘が来日した時から住んでいる部屋に住み続けている。このように娘の来日によって、Aはこれまでかかわりのなかった日本社会の様々な側面と関わることになる。それにもとまない、それまで知らなかった支援を受けることにもなった。

2020年からはコロナ禍で、医療従事者であるAの仕事も様々な制限や規制を受ける。通勤も公共交通機関を利用するのは心配だとバイクを購入する。そのバイクで、休みの日に郊外までツーリングをしたりするのが楽しみだという。娘は年ごろなので、友人と出かけたりしているようで、それなりに楽しんでいるようにみえる。

一方インドネシアでは、長男の大学進学が決まった。長男は経営、ビジネス関係について勉強するようなので、将来的には長男と、何か「日本に関わりのあるビジネス：未来のEFP」ができないかと考えたりする。はじめて日本に来てから、15年近くが経った。途中帰国したことから、永住権申請の条件はまだ満たしていないが、今後申請することも考えている。もうインドネシアの看護現場のことはわからないが、まさか日本にこんなに長くいて、このように様々なかかわりをもつことになるとは思わなかった。娘も高校を卒業しても、日本で進学することを希望しているようなので、日本ででの生活はまだ続くだろうと考えている。

以上を、Aのライフストーリーから示される、「日本の定住外国人としての生活」をEFPとしたTEM図に示した。ところでEFPの手前にあるように、Aはインドネシアの看

護大学に編入している。Aは看護学校の卒業生で、大学卒ではない。ちょうどコロナ禍ですべてオンラインで授業が受けられ、単位が取得できるということで、将来帰国したときに有利かもしれないと思い、勉強しているようだ。つまり定住外国人としての生活が安定しており、永住権の取得や日本とのビジネスなど、日本と関わり続けることを見据えながらも、将来的には帰国し、インドネシアで新たなライフを築くことも視野に入れていることがわかる。

## 5. 本研究の意義と今後の課題

本研究では、EPA看護師候補者として来日したインドネシア人が、日本の看護師国家試験に合格し、正看護師として日本で働いて定住していくプロセスを追った。一度は帰国したが再来日し、家族の来日によって日本での生活が構築されていく変容をTEM図によって示すことで、定住化が本人の意向だけで確立されてきたものではないことも明らかにされたといえる。そして日本での生活の構築とともにインドネシアの家族の存在、将来的な帰国の可能性などの迷いも見える。

本研究は「1人を深く分析する」ことを目的にしたため、あくまで1ケースでしかない。しかし、確実に増えつつある外国人移民、そしてその姿の一端を詳細に示すことで、移民の多様性を示唆することができればと願う。

なお、分析方法の項でも述べたが、本研究でのデータはTEMで行うために行ったインタビューのデータではない。そのため、EFP「日本の定住外国人としての生活」への示し方が十分ではないかもしれないと感じている。この点については今後の課題としたい。

## 参考文献

- 浅井亜紀子・箕浦康子(2020)『EPAインドネシア人看護師・介護士の日本体験』明石書店。
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ(2012)「複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25, pp.95-107.
- 岩田一成・庵功雄(2012)「看護師国家試験のための日本語教育文法 必修問題編」『一橋大学大学教育研究開発センター・人文自然研究』第6号, pp.56-71.
- 岡田朋美・宮崎里司(2012)「EPA看護師の国家試験合格後の課題－国家試験後の日本語支援者の役割とは」『2012年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.223-228.
- 奥島美夏(2010)「インドネシア人看護師・介護福祉士候補の学習実態－背景と課題」『国際社会研究』1号, pp.295-342.

インドネシア人看護師の定住外国人としての「ライフ」のプロセス（中谷潤子）

奥田尚甲（2011）「看護師国家試験の語彙の諸相－日本語能力出題基準語彙表との比較から」『国際協力研究誌』, 17 (2), pp.129-143.

中谷潤子（2017）「EPAインドネシア人看護師の滞日および帰還へのプロセス－ライフストーリーより」『大阪産業大学論集人文・社会科学編』 第29号, pp.67-76.

平野裕子・米野みちよ編（2021）『外国人看護師－EPAに基づく受入れは何をもたらしたのか』 東京大学出版会.

安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEMでわかる人生の径路－質的研究の新展開』 株式会社誠信書房.

安田裕子・サトウタツヤ（2022）『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述－保育, 看護, 臨床, 障害分野の実践的研究』 株式会社誠信書房.

やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味－なぜライフストーリー研究か」『教育心理学年報』 第39集, pp.146-161.

厚生労働省「経済連携協定における受け入れの枠組」

<https://www.mhlw.go.jp/content/000639886.pdf> (2022年9月11日アクセス)